# 白杖（はくじょう）が命綱

中　二

みなさんは、白杖というものをご存じですか。白杖とは、目の不自由な方が周囲の状況を確かめるために使う杖（つえ）のことです。特に全盲の方は、白杖と周りの音を頼りに生活しています。それは、私たちが想像する以上に大変なことだと思います。しかし、そうして生活する方に、思いやりをもって接することができない人もいるのです。

私が小学生のとき、目の不自由な方がコミュニケーションを上手にとれずに、周りの人とトラブルになっているのを見たことがあります。私はあのとき、自分も巻き込まれたら嫌だなと思い、心の中で「もうやめて」と思っていました。しかし、心の中で思っていただけであり、実際に行動に移したわけではありません。これは私の弱点です。思ったことを行動に移せないことがあります。あのとき、私は、その方をかばうことによって、自分も巻き込まれたらどうしようという、自分優先の考えでその方を助けることができず、ただ見ていることしかできませんでした。幸いそのときは、すぐに周囲にいた人が説得し、その方が大きな怪我をすることはありませんでした。私はそのとき、すぐに助けに入ることができた人をかっこいいと強く思いました。

目の不自由な方にとって、こうした状況がどれだけ怖いことなのかは計り知れません。たとえ私たちが目をつぶって歩いたとしても、それは一時的なことです。気持ちが完全に分かるわけではありません。でも、やはり、目が不自由だというのは、生活に不安を覚えるものだということは分かります。だから、私は自分でできることをやろうと思います。

まずは、点字ブロックの上に物を置かないことです。これは、当たり前のことに思うかもしれませんが、このようなことはよくあるのです。例えば、自転車が駐輪場ではなく、点字ブロックの上に置かれているのをよく見ます。目の不自由な方にとって、数少ない情報を得られるもののうちの一つを、目が見える方に奪われるというのは、かなりの苦痛だと思います。私自身も含め、駐輪場以外の場所には、自転車等の物を置かないように

心がけたいです。

次に、優先席を空けることです。目の不自由な方は、優先席が空いているのか、空いていないのか、すぐには判断できません。だから、常に優先席を空けていることが望ましいと思います。しかし、見た目だけでは判断できない場合もあります。例えば一見、元気なように見えるけれど、実は持病があるといった場合もあります。そのようなとき、擦れ違いが生じ、トラブルに至る場合もあるかもしれません。このようなことが起こらないようにするためにも、優先席を常に空け、必要に応じて席を譲るということに取り組んでいきたいと思います。優先席を安心して利用できるよう、私たちが利用しやすい環境を作ることが大切だと思います。

最後は、知識を身に付けることです。目の不自由な方は、目の見える方には分からない様々な場面でつらい思いをしてきたと思います。私たちが、目の不自由な方にとって必要な白杖や盲導犬などに対する知識を深めれば、目の不自由な方が少しでも生活しやすい社会を築けるかもしれません。このことは、実際にやってみないと分からないことが多いと思います。だから自分のできることから進めていきたいです。また、目の不自由な方を見かけたら、どんな状況でも気遣うといったことも心がけていきたいです。

今回、この作文に取り組むことで人権について考えることができました。人権というのは、人間が生まれながらにもっているものです。しかし、社会的には環境が整っていない部分もあります。私は、みんなが生活しやすい環境が整っていくことを望んでいます。そのために、自分もそうした社会にするための力になっていきたいです。目の見える方と目の不自由な方は、人権という権利の上で何か違うことはありますか。私は、ないと思います。私たちが得ている情報を目の不自由な方が得ることができないということは、むしろ補うべきではないでしょうか。私たちが事故や怪我に気を付けているように、目の不自由な方は、私たちよりもより一層気を付けています。そのときに必要になるのが白杖です。その白杖が使いやすいような環境の整っている社会を目指していきます。